

『アメリカの良心—エレノア・ルーズベルト—』



最近、女性の権利擁護についての主張がよく見られます。特に、日本では、女性の社会的地位が低く、国際的な批判を浴びています。国会でも問題になっていて、男女雇用機会均等法などの法律も大きく改訂されました。

私の個人的な話しですが、女性に対して決して自分を上に見たことは一度もありません。それどころか、研修医時代には恐ろしい先輩の女医さんがいて、怖い思いをしたことが何度もありました。

いつ頃から女性の権利の重要性について議論されるようになったのでしょうか。

実は、人権や女性の権利についての重要性が主張されるようになったのは、そう古い話ではなく、第二次世界大戦以後のことです。つい最近のことで、100年も経っていません。

その先頭をきって走っていたのが、エレノア・ルーズベルトなのです。フランクリン・ルーズベルト大統領夫人です

エレノアの幼少期は決して幸福とはいえなかったようです。母から愛情を感じるができず、また自身の容姿に強い劣等感を抱くようになりました。10歳を迎える前に両親が他界し、祖母に育てられています。フランクリン・ルーズベルトと結婚後、政治家の夫がポリオを患い、歩けなくなり、政治生命が危ぶまれました。しかし代理として演説に立ち、二人三脚で支えてきました。

ルーズベルト大統領の人道主義は、エレノアのアイデアによるところが大きいのです。大統領の死後アメリカの国連代表となったエレノアは人権擁護のために突き進みます。

二度の戦争の惨害から将来の世代を救うため、人類は国際連合(国連)を設立し、平和への道を模索し始めました。その国連で「すべての人民とすべての国とが達成すべき共通の基準」として公布されたのが「世界人権宣言」です。第一条で「すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である」とうたう宣言の起草に尽力した一人の女性がいました。「アメリカの良心」とたたえられる第32代米大統領夫人、エレノア・ルーズベルトです。

宣言が採択されたのは、第二次世界大戦から3年を経た1948年12月10日です。東西冷戦が始まっていて、あらゆる「差異の壁」を超克し、一つの宣言を作り上げることは不可能と思われていました。しかし、エレノアの心には「もう二度と同じ過ちは繰り返さない。必ず成し遂げてみせる」との誓いが燃え上がっていました。

彼女は国連人権委員会の委員長として、各国の代表者と顔を付き合わせ、一つ一つの文言に平和への願いを込めていきました。草案作成の委員会議は実に85回にも及び、時には意見が衝突することもありましたが、その信念はいささかも変わらなかったのです。同じ人間であるゆえに、胸襟を開いて語れば、必ずわかり合える。互いの相違点ではなく、類似点を見つめ、一人一人に心を結び続けたエレノアの執念によって、宣言が採択されたのです。

「そんなことできるわけがない」という人間からは何一つ生まれたためしがない。が口癖でした。「恐れるよりは希望をもつこと、やらないよりはやる方が賢明なことはあきらかである。」とも言っています。エレノアは文字通りリベラル・アメリカのシンボルであり、スターだったのです。